

～みんなちがって みんないい (その4)～

今月は「特別支援教育」と「発達症(発達障がい)」についてお話しさせていただきます。初めて読まれる方は驚かれるかも知れませんが、実は誰にでも当てはまる事が分かっていただけたと思います。

発達に遅れはなく、普段の生活では問題がなさそうに見えるのに、授業中「じっと座ってられない」、「点数や勝敗にこだわり、間違えたり失敗したりするとキレたりパニックになったりする」、「友だちと対等で友好的な関係が築けない」「コミュニケーションが取りづらい」など、本人も周りも困り感を抱えてしまう子がいます。

他にも「環境が変わったり、初めてのことに戸惑ったりして、慣れるまでに時間が掛かってしまう」、「計算は得意なのに、字を読むとたどたどしかったり、読めても内容が理解できていなかったりする」、「漢字の読み書きや計算、図形の理解が他の子に比べると極端に苦手な遅れが見られる」など、実はまだまだたくさんあります。

これらの子どもの中には「発達症(発達障がい)」と言われる子どもたちもいます。

このような困り感の原因は脳の機能障害に起因しますが、一見すると何も問題が無いように見えるため、「我慢が足りないから」、「本人の努力不足」、「親の躾が悪い」などと誤解されがちです。この誤解が、「必要以上に厳しく躾ける」、「周りから低く見られる」要因となり、「素行不良」や「精神疾患」などの2次障害に繋がることも少なくありません。

主な発達症は、LD(学習症)、ADHD(注意欠如/多動症)、自閉スペクトラム症がよく知られています。他にも「発達性協調運動症」や「選択性緘黙(場面緘黙:かんもく)」、「知能が平均よりも高過ぎる高知能」など、発達症と呼ばれる症状は多くあります。

令和4年度の文部科学省による調査では、通常学級に在籍する児童生徒で、発達症の可能性を示す児童生徒が8.8%、何らかの特別な支援が必要な児童生徒が28.7%いるとの結果が出されました。気付かれないまま過ごしている児童生徒もいるので、実際にはもっと多くの児童生徒が困り感を抱えていると思われます。

「発達症は大人になれば治る」とか、「子どもの時だけ」ではありません。もちろん成人にも発達症の方はたくさんいます。気付いていないだけのこと

が多いのです。

橘 玲(たちばな あきら)著「もっと言うてはいけない」の中で、OECD(経済協力開発機構)が2013年に行った16歳～65歳を対象とした「読解力・数学的思考力・IT活用による問題解決能力」の国際調査の結果について紹介されています。調査の結果、日本人のおよそ3分の1が読解力に問題を抱えていることが分かっています。計算はできても、問題文の意味が理解できず、立式できない状況と同じです。これは日常生活の中で考えると、「取扱説明書」を読むことが苦手で、様々な機器の機能を十分に使いこなせないまま過ごしている、という例で説明することができます。もちろん、取扱説明書が理解できなくても生活はできますが、もしこれが仕事上で必要な能力だと考えるとどうでしょう。

2015年に野村総合研究所が発表した「10～20年後、日本人が就いている職業の49%は、機械や人工知能で代替可能である」という予測は、現実的なものになりつつあります。AIによって私たちの生活はとても便利になっていますが、一方で仕事を失っていく現実があることが心配されます。

みなさんはテレビやインターネットで話題になった児童精神科医 宮口幸治さんの「ケーキの切れない非行少年たち」を読まれましたでしょうか？

宮口さんはこの本の中で、丸いホールケーキの絵を3等分できない少年たちが抱える苦悩と問題について、医学的にそして教育や国のサポートなどと合わせて問題提起されています。

また、宮口さんは幼児期から社会性や学習機能の基礎能力を向上させる「コグトレ」の開発者でもあり、子どもの成長の一助を担ってくださっています。

「障がい」は三つの要素「インペアメント(欠損)・ディスアビリティ(能力不全)・ハンディキャップ(社会的不利)」から構成されていて、発達症は「ハンディキャップ(社会的不利)」であると言えます。

「特別支援教育」に対して負のイメージをお持ちの方が多いと思いますが、「理解」と「支援」により、子どもの可能性は広がります。

時代は大きく変わっています。個性を尊重し、個別に能力を伸ばしていくことと、社会や集団の中で協働・共生していく力を身につけることが、これからの時代を生き抜く力になります。

子どもの将来をより良く変えていくためには、保護者の方々、家族、教育者、地域全体が協力し、正しく理解し支え合っていくことが大切です。